

解題

アウトカム社会と新しい資本主義

山崎 秀夫*

■進化系の人類学で振り返る新しい資本主義

今大量生産・大量消費に代わる新しい資本主義が到来したという時代認識が世界中に広まっています。そうした中でちょっと人類の歴史を振り返ってみましょう。

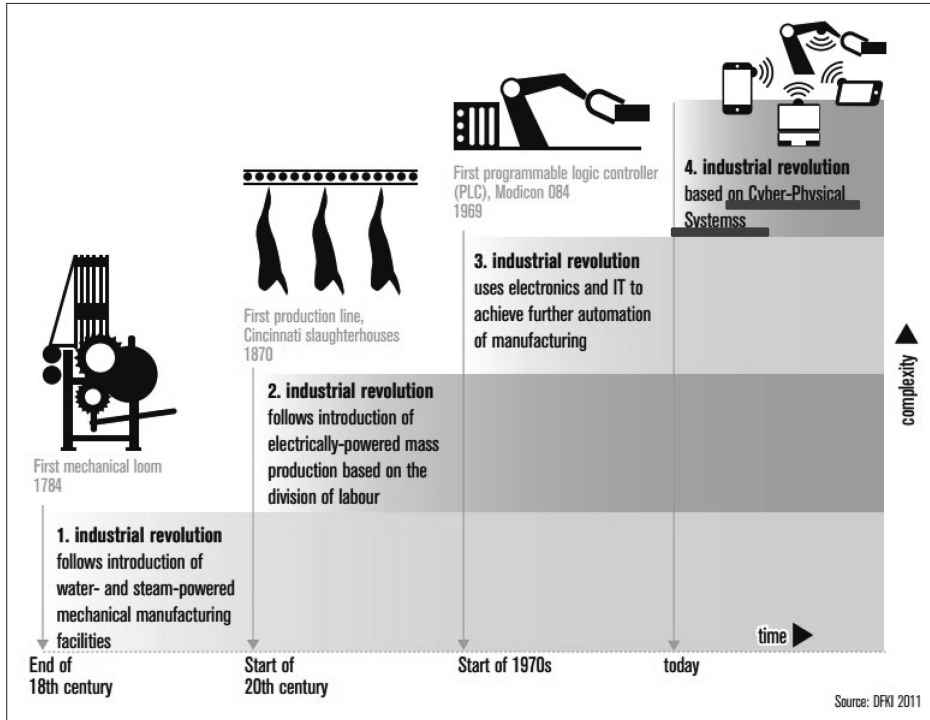
我々ホモサピエンスの特徴は①道具を使い②火を用い③言大きな頭脳を持ち二足歩行をするといったことが挙げられています。新しい資本主義では道具はスマートデバイスと言われてインターネットにつながるようになり、火に関しては危険な廃棄物を出す原子力エネルギーからの脱却の在り方を未だに模索中です。

進化系の人類学者の中には約6万年前の出アフリカの頃から人類は高度な言語能力を獲得し、その結果、コンセプト能力（抽象思考力）を身につけ、貝殻などの装飾品や壁画、飛び道具を使うようになり、人類の大躍進が始まったと言う説を唱える方々もおられます。一言で申し上げます、高度な言語能力獲得後、ホモサピエンスは姿や形をどんどん変え始めたと言うジャレット・ダイヤモンド氏

らの学説です。その結果、変化のほとんどないネアンデルタール人が減び、その後現生人類であるホモサピエンスは世界中に繁茂しました。自らの姿や形をどんどん変えると言う、いわば創造性を人類が如何に獲得したかと言う点については、二足歩行仮説や社会脳仮説など諸説がありますが、有力な説の中にジェフリー・ミラー氏らの「性淘汰仮説」があります。簡単に申し上げれば美しいクジャクの羽と同じように（遺伝子の生き残りのために）男性が女性に花などを贈り始めた創意工夫が歌や壁画などの芸術の創造の開花に繋がり、やがてそれが産業革命を生み出したと言う説です。そして新しい産業革命、新しい資本主義の特徴は自分達の姿や形をどんどん変化させるイノベーションの速度が一段と高速化している点でしょう。進化心理学ではある生物がクジャクの羽のように姿かたちをどんどん変え始めたなら、その勢いが止まらなくなることを「ランアウエー効果」とよんでいます。ホモサピエンスの場合、創造性のランアウエー効果が更に加速しているという見方

* 株式会社 Beat Communication 顧問

図1 インダストリー4.0のコンセプト



出所：Recommendations for implementing the strategic initiative INDUSTRIE 4.0.

ができます。そうなればランアウエー効果についていけない個体や社会は衰退してしまいます。

私は新しい資本主義が叫ばれる中、この変化の社会的速度の高速化（「一種のランアウエー効果」と言うべきイノベーションの高速化に日本が遅れ始めている点を危惧しています。かつてスペインやポルトガルの無敵艦隊が英国に敗れて後国が衰え、中国が清と呼ばれた時代にアヘン戦争で敗北後、やはり国が衰えています。社会の姿や形が更に高速に変化する新しい資本主義のイノベーションスピードについていなければ21世紀の日本もかつてのスペインや清国と同じ運命をたどるかもしれません。

■スイスのダボス会議が広めた新しい資本主義時代の認識

さて新しい資本主義に関しては毎年、年初にスイスで開催されるダボス会議（世界経済フォーラム）が注目しています。ダボス会議の2015年のテーマの一つは「アウトカム経済」であり、2016年にはインダストリー4.0が議論されました。その結果、グローバルに第四次産業革命が起こり、新しい資本主義の時代が来たと言った認識が世界中に広まりました。丁度、約200年前のナポレオン戦争後の後始末の為のウィーン会議が逆に「国民国家の時代到来」と言う認識を世界中に広め、神聖ローマ帝国が減び、ハプスブルク家が磨き上げたワルツが、市民社会の男女の新しい

社交の手段、新たなライフスタイルとして急速に広がった歴史を思い起こせば感慨深いものがあります。

第19回日本ナレッジマネジメント学会のテーマ「アウトカム社会 新しい資本主義のためのビジネスモデル、ライフスタイルの追及と創造性」はそこにヒントを得て設定しています。

清教徒革命後の英国ロンドンでは中東から輸入されたコーヒーハウスが大流行し、そこで様々な貿易商たちがコーヒーハウスでの議論を通して証券取引所や商品取引所、ロイター通信やロイズ保険会社など新たな組織や制度を生み出し、コーヒーハウスを通して新聞を読む習慣も普及しました。コーヒーハウスのメイドにお辞儀してから入場する紳士のマナーなどもそこで醸成されています。これらは一種のプロセスイノベーションと考えられます。

新しい産業革命の中、シリコンバレーやサンフランシスコに繁茂しているコワーキングスペースは、ソフトウェアやスマートデバイスの開発者が、お互い同士、自由な議論に参加できる場所です。対象はモノづくりやソフトウェアづくりなどのプロダクトイノベーションですが、ロンドンのコーヒーハウスで起こったかつての歴史が繰り返されているような気がします。創発性を重視するアイデアソンやハッカソンなどのシリコンバレーのスタートアップ企業の間での大流行もアングロサクソンに見るロンドンのコーヒーショップの伝統が背景にあるのかもしれませんが。まるでフランスのサロンを貴族が支えていたかのようにアイデアソン・ハッカソンは先進的な大

手企業が資金を出したり、主催しています。そしてフランスの場合、コーヒーショップやサロンはフランス革命の温床になりました。

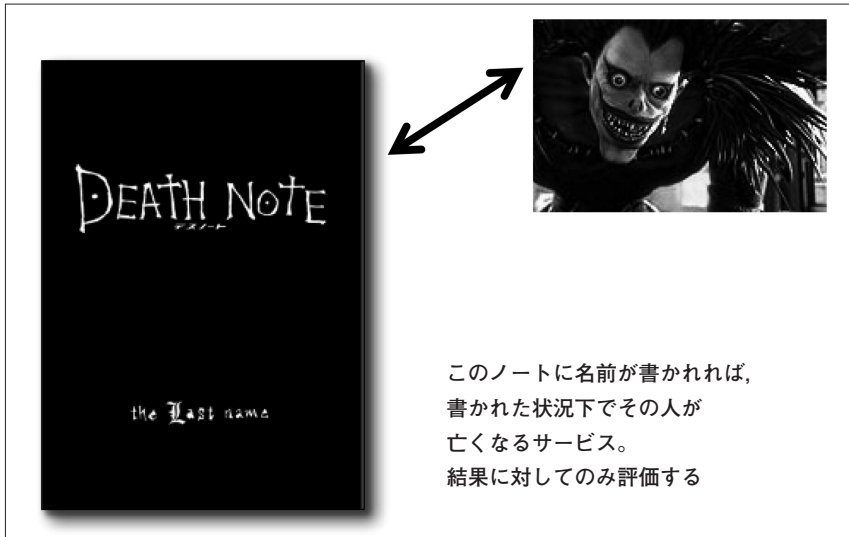
■アウトカム経済とは何か

さて新しい産業革命はインダストリー4.0とかIoT（モノのインターネット）と呼ばれています。特に叫ばれているのは「サイバーフィジカル」と言う特徴です。このサイバーフィジカルこそが「アウトカム経済」の新資本主義版に他なりません。

約1万年前の農業革命に続いて今から約250年ほど前に英国で産業革命が起こり、続いて20世紀初頭にはT型フォードに代表される第二次産業革命が起こり、先進国では「豊かな社会」（J.K. ガルブレイス）が出現しました。その後戦後の大型コンピューター活用による第三次産業革命へと続きます。そして今回はすべてのモノがインターネットに繋がる第四次産業革命の時代であり、2007年のスマートフォンの発明、2008年のリーマン・ショックがそれを加速したというわけです。その特徴は「アウトカム経済」と呼ばれています。

アウトカム経済とは1968年、米国ハーバード大学のセオドア・レビット教授が「マーケティングの近視眼」と言う論文で指摘したマーケティングのあるべき姿です。彼は人々がドリルを買う理由は「ドリルを欲したからでなく、4分の1インチの穴を欲したから」と主張しました。これが現代では「モノ支配論理」から「サービス支配論理」への転換と言われるものです。当時は技術基盤の限界もあり、ドリルではなく、（サービスとしての）

図2 日本の映画「デスノート」もアウトカム経済発想……



このノートに名前が書かれれば、
書かれた状況下でその人が
亡くなるサービス。
結果に対してのみ評価する

出所：映画デスノート。

ドリルの穴の提供は非現実的でした。しかしあらゆるモノがインターネットに繋がる新しい資本主義の技術環境下（インダストリー4.0とかIoT）では現実に「コマツの自動運転建機や掘削機」のように建機をサービスとして提供し、サービスの結果に対して対価を払う「ペーパーアウトカム」が実現できる時代が到来しています。こうしてコンピューターのアウトソーシングビジネス（一種のサービスビジネス）があらゆる機械メーカーに広がろうとしています。単に機器を販売するだけではなく、インターネットでの接続により機器の保守や稼働と言うサービスで稼ぐ方向に全体が向かっています。それが単体の機器だけではなく工場全体や部品工場、販売店を含めたバリューチェーン全体に広がろうとしています。

IoTやインダストリー4.0と言う発想は、実は日本でも独自に考え出されています。但

し、映画や漫画の話ですが。日本の映画に「デスノート」があります。ヤガミライト君などがデスノートに名前を書いた相手は死神がその仕事を請け負った結果、デスノートに書いた通りの状況で死亡してしまいます。死神は今で言うインターネットとAIで自動運転や3Dプリンターを操作すると言った役割を担っていると考えられます。ノートの価値では無くノートに書かれた事を実行した結果の価値に対価を払う、これがサービス支配論理、アウトカム経済です。

IoTの標準化団体であるオールシーン・アライアンスは、モノとしてのスマートデバイスの提供するサービスとして、主人の気持ちを付度し、スマートデバイスが自発的に協力しあってサービスすることまでイメージしています。丁度、日本昔話の「木仏長者」のシーンのようです。木仏様と金仏様が土俵の上で突然、相撲を取り始めると言う有名なシー

ンです。新しい資本主義ではモノは人類の友達になったり、死神のように怖い存在になったりしそうです。従って新しい資本主義の発想は決して日本の社会に馴染みがないものではないのです。一方アメリカ人の多くは1980年代の有名なテレビドラマ「ナイトライダー」に出てくる、自動運転ドリームカーのキットと乗車するマイケルが進める会話のシーンもまた「サービス支配論理」のあるべき形としてイメージしているようです。あらゆる機器やモノがインターネットに繋がり、クラウド型コンピューティング、AIの活用や音声インターフェイスにより、現代のピノキオのようにまるで生き物であるかのような振る舞いをすると言うのも一種のサービス支配論理の在り方です。単なるモノとしてモノを見るのではなく、稼働中のモノにはまるで精霊が宿っていると言った見方をします。正に現代のピノキオ、日本で言う針供養、人形供養の世界観です。

■人の創造性か AI か

日本ナレッジマネジメント学会が参加しているKMGN (KNOWLEDGE MANAGEMENT GLOBAL NETWORK) と呼ばれるナレッジマネジメントの国際学会連合があります。2015年のKMGNでのシンガポールでのセミナーの大きなテーマは「AIか人の創造性か」と言った内容でした。米国の有名なナレッジマネジメント研究家のトーマス・ダベンポート氏がナレッジマネジメント研究を放棄してビッグデータ (AI研究) に転向したと言うので欧米では騒ぎになっています。それに対処するかと言った内容でした。では日

本ナレッジマネジメント学会は一体、如何なる姿勢をとるべきか。結論から申し上げれば、AIができる領域はAIに任せるべきです。その結果、第二次産業革命により動力で動く自動車が普及し、多くの御者と馬が一時的に失業するような事態も避けられないでしょう。一方新しい産業革命の特徴はスタートアップ企業の創業者がおしなべて言っているように人生の出来事などを契機とする創発的な要素が強い、スピード感溢れるイノベーションです。人生の出来事や人々との偶然の出会いによるイノベーションは、AIによるシミュレーションではそう簡単に真似できない領域です。(但し、ナレッジマネジメント学会はITやAIの進歩を大いに歓迎することはあっても、その発達を批判したり、人の創造性の方が優れていると決めつけ、それを抑える姿勢を取ることは決してありません) 人の創発的なアイデアとAIの関係の基本は経済学でいう「代替材」ではなく「補完材」ととらえるべきなのです。AIは選挙権を持っていないので米国大統領選挙でドナルド・トランプ候補に投票することは決してありません。

■新しい知識モデルが必要

では新しい資本主義の特徴を知識モデルで表現するにはどうすればよいでしょうか。非常に重要な点は「モノづくりの重心が工場の手先の技 (昔は暗黙知と表現されました) からオフィスにおけるソフトウェア開発に移行しつつある」と言う認識です。ナレッジマネジメント関連で提唱されている知識モデルは数々あります。私はカールホッパーの三世界モデルの修正系を使って理解しています。三

世界とは以下の三つの領域で表現されます。

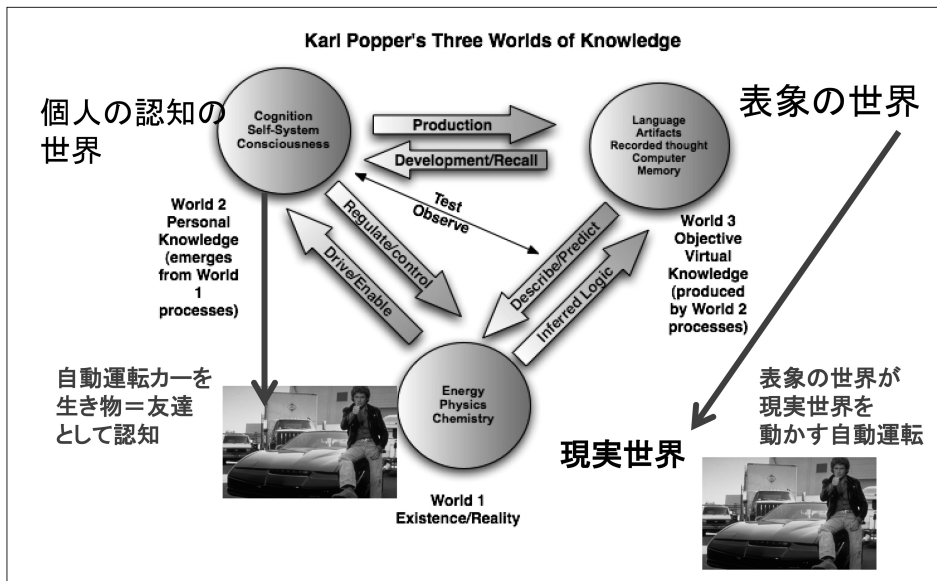
- ① 第一世界：現実世界
- ② 第二世界：個人の認知や無意識の行動による自己表現の世界
- ③ 第三世界：表象の世界（情報や知識、ソフトウェアによるシミュレーション、3Dの世界など）

例えば新しい産業革命におけるスタートアップ企業の創業者の多くは、第一世界で偶然の経験や偶然の出会いにより、第二世界で創発的なアイデアを生み出し、それを第三世界でソフトウェアなどによるシミュレーション後、3Dプリンターなどで現実世界（第一世界）におけるプロトタイプ作りをする方向に向かっています。様々な自動運転もこの範疇（第三世界が第一世界を勝手に動かす）に入ります。新しい資本主義の時代には創発的なアイデアを早く形にする3Dなどのシミュレ

ーション、様々なモジュール部品を寄せ集め（ハードウェアとオープン化されたソフトウェア）、3Dプリンターによる部品も加えた速いプロトタイプ作りが重要になります。野中理論で申し上げれば、新しい産業革命では連結化が最も重要と言うことになるでしょう。そして創発の現場は大手の組織からスピードの速い個人やスタートアップ企業に移行し始めています。

既に様々なデジタル部品やオープンソフトウェアの市場が整って居るため、デジタルと言うギリシャの女神が手を触れた様々な部品の取引コストはどんどん下がり、その為、部品を内製化する、内部の意思決定に時間がかかる大手企業よりもスタートアップ企業が有利になっています。更にクラウドソーシングやアプリストア、クラウドファンディングなどがスタートアップ企業の高速イノベーション

図3 AIやソフトウェアの役割を敢えて知識モデルで表現すれば……



出所：カールポッパーの三世界モデル。

ンを加速しています。その結果、大手の組織の規模は次第に縮小し、イノベーションはスピードの速いスタートアップ企業に移行し始めています。その結果、先進的な確立された大手企業もスタートアップ企業の創造性や創発性を取りこむ為、アップストア、ハッカソンやアイデアソン、インキュベーションセンターなどを立ち上げています。

■ムーアの法則、消費者の高次欲求

新しい資本主義の到来をもたらしたのは生産性が2年で倍になると言われている、インターネットの発達に代表されるICTのムーアの法則だけではありません。マーケティングの大家、フィリップ・コトラー教授の指摘通り、産業社会の成熟の結果、消費者に成熟社会の高次欲求が出ている点も重要です。

成熟社会における高次欲求とは一体何でしょうか。一般に衣食足りて礼節を知ると言う諺があります。アブラハム・マズローの欲求階層説で申し上げれば、生存の欲求や安全の欲求が「衣食」の部分、即ち「モノ支配論理」を意味すると思っています。一方社会に受け入れてほしいと言う親和欲求やプライドを持って働きたいと言う自尊の欲求、更に仕事で雇われ感覚を払拭し自由な自己表現をしたいと言う自己実現欲求、真善美を追求したいと言った社会貢献欲求は心理的欲求であり「サービス支配論理」の欲求と言うことになります。

面白いのは新しい資本主義の下では、先進国は押しなべて「個の可能性を目いっぱい引き出す。個の寿命を目一杯伸ばす。それと同時に個体の数が減り始める」傾向がありま

す。同じ予測は自動車などの機械商品についても当てはまります。自動運転の時代になれば、「個々の車の稼働率を100%に引き上げる。予防保守により車の寿命が大きく伸びる。すると自動車市場そのものは大きく縮小する可能性がある」と言うものです。

新しい資本主義に対する私のただ一つの疑問は「人口が減少する中で新しい産業革命は可能か」と言うものです。そんな例は過去聞いたことがありません。若者の数が増えない活気のない社会で果たして新しい経済・社会の革命は可能なのでしょうか。

■個人、スタートアップ中心のイノベーション時代

更に重要な点は新しい資本主義では、安いモジュール部品（取引コストの低減）、オープンソフトウェア、クラウドファンディングやクラウドソーシング、アクセレレーターなどに支えられて、個人やスタートアップ企業がイノベーションの中心に躍り出始めた点でしょう。そうなれば社内稟議制度など無縁のスタートアップ企業によるイノベーションは、否が応でも加速します。米国ではグーグル、アップル、マイクロソフト、インテルなどの大手企業も同じスピードでイノベーションを実施している点が注目されます。その手法をGEやシーメンス、フォードなど伝統企業を取り入れ始めています。そういう時代になれば社内で部品の内製化を行っている大手の組織はイノベーションのスピード上不利になり、組織の規模が縮小する傾向が出てくると考えられます。

日本ではこのトレンドの最初の波の犠牲と

なったのがいわゆる「家電崩壊」と言った現象であったと考えられます。テレビがスマートテレビに移行し、携帯電話がスマートフォンに移行する中、韓国の製品でも日本製品でも消費者にはほとんど変わらなくなります。そうなれば値段が安い方がよく売れます。またこの中で最も勝ち残ったのはサービス支配論理のビジネスモデルを作り上げ、それを忠実に実行した米国のアップルでした。

最近では米国でスポーツの専門店チェーンであるスポーツオーソリティがIoT倒産しました。ライバルのナイキなどがスポーツシューズなどをインターネットにつないでヘルスケアデータのAI分析で先行する中、同社は従来型の「モノ支配論理」から抜け出すことができなかつた為だと言われています。一昔前はアマゾンでの家電販売がサーキットシティを倒産に追い込んだり、書籍チェーン店のボーダーズを倒産させるなど、インターネット通販と言ういわば空の戦いが特徴でしたが、現在では完全に地上戦に重点が移っています。

■新興国が先を行く

さて先進国では新興国から移民を受け入れない限り人口が減少すると言った状況下、場合によっては新しい産業革命、新しい資本主義の下では新興国の制度や組織が先進国の上を行くレベルで組織化される可能性もあります。その例がアフリカのケニヤで出ています。中国の資源需要の成長に刺激されて現在、多くのアフリカ諸国では第一次産業革命から第四次産業革命までの変化が同時に起こっている状況下にあり、中産階級が登場して

います。一方で銀行制度の普及の遅れとモバイルフォンの速い普及があります。その時差を縫って通信キャリアに預金（電子マネー）をするフィンテックが成長しており、最大規模のM-Pesaは就業人口の7割近くが利用しています。タクシーや都会の物売りでさえ、モバイルフォンベースの電子マネーを利用しており、この点スイカやパスモと言った古い電子マネーや現金での消費が主体の日本の消費経済や消費生活は「まるでロンドンの地下鉄のように」（インド中央銀行総裁）古ぼけて見え始めています。こう言ったインターネットに口座を持つ新しい電子マネーの普及は中国も同じであり、現在、アジアを中心としたTPP関連諸国やその周辺諸国に急速に普及が始まっています。

■対抗文化と雇われない働き方

さて話はまた変わりますが、新しい資本主義という視点からいえば、見逃せない点はIoTなどの新しい波は1960年代から続いている対抗文化（カウンターカルチャー）の影響を受けている点です。1960年代、70年代には米国西海岸を中心に反戦運動が盛んになり、ヒッピー、ドラッグやコミュニオン運動、新興宗教などが立ち上がりました。それに第二次産業革命の大量生産・大量消費がもたらす画一社会についていけない人々が大量に企業や学校からドロップアウトしました。そして彼らの中からインターネットに繋がる研究やパソコンのビジネスが登場しました。初期のコンピューターやインターネットの立ち上げに関与したダグラス・エンゲルバードさんや「コンピューターパワーを大企業から人民の

手に取り戻す」と述べてパソコンのコンセプトを提唱したアラン・ケイさん、一時宗教にのめりこみ、コミュニケーションで暮らした後、アップルを立ち上げたスティーブ・ジョブズさん、ホームブリューコンピュータクラブを立ち上げた反戦運動家のフレッド・ムーアさんなどが知られています。画一的なライフスタイルを拒否し、多様性や個性などの自由な自己表現や自律を求める対抗文化（カウンターカルチャー）は、その中から生まれたコンセプトであるオープンシステムや砂漠の中での芸術家の有名な村づくり「パーニングマン」（多くのシリコンバレーの起業家やソフトウェアエンジニアが参加する、米国ネバダ州の夏の風物詩）などを通してその大きな影響は現代につながっています。

更に注目すべきは1980年代頃から第二次産業革命で日本に敗れた米国では、長期雇用性が廃止される一方雇われない働き方やミニ企業家層が大量に登場し始めている点です。特に2008年のリーマン・ショックと呼ばれる経済恐慌の後には、多くのアメリカ人が仕事を失い、その後仕事を得てもパートタイムでしかないと言った状況下、シェアの経済やオンデマンド経済と呼ばれる新しい働き方（フリーランスやミニ企業家）への移行が加速しました。丁度、その時期にはスマートフォンの本格版がアップルから登場しています。「旦那さんがやっと得た仕事がパートでは、一家は食べていけない。子供がいる私は午前中の3時間ならば働ける」と言った人々がフリーランスによる自家用車を利用する有名なUberの運転手や家事代行サービス、自宅の一部を貸して稼ぐAirbnb（民宿）、フリーラ

ンスでの宅配業務などに乗り出しました。スマートフォンの普及とリーマン・ショック後に起きた豊かな社会の崩壊と格差の広がりがその背景にあります。フリーランスやミニ企業家などの雇われない働き方への動きは「新しい社会契約」という見方も出ており、2015年現在、ミレニアル世代（2020年ごろまでに21世紀に成人する世代）の38%、全米人口の34%が何らかの形で関わっており、2020年には40%に達するという予測もあります。日本もある意味で米国同様の動きをしています。実際、現在では非正規労働が全体の40%（厚労省の2015年調査）と言う状況ですが、米国のようなフリーランス、ミニ企業家層の台頭は残念ながらあまり目立っていません。その中で自らの子育てで復帰経験からフリーランスによるハウスキーピングの代行サービスを起業されたタスカジの創業者和田幸子さんらの動きは注目に値すると思っています。

新しい資本主義が先行する米国ではスマートフォン呼び出しタクシーのUberやLyftなどが主要都市で軒並みタクシー市場の半分を制覇し、その為サンフランシスコ最大のタクシー会社、イエローキャブの倒産が出ています。シェアの経済やオンデマンド経済は恐るべしです。

そうした中、米国ではフリーランスの社会保険制度などまるで中世のギルドを守ったような新しい組織・制度が生まれ始めています。

かつて共産主義運動が華やかだった時代と言われていた「賃労働と資本の関係」や「労働力の商品化」、マックス・ウエーバーが「プロテスタンティズムと資本主義の精神」

図4 雇われない働き方, ミニ企業家



の中で指摘した「黙々と働く労働者」と言った働き方が既に過去のものとなろうとしています。

米国ではレインボウ運動と呼ばれる LGBT (レスビアン, ゲイ, バイセクシュアルシュアル, トランスジェンダー) への就職差別反対運動が盛んです。そしてシリコンバレーの大手企業を中心として多くの企業が運動に賛同を示しています。アップルやフェイスブックなどは CEO が旗を振ってデモに参加する事態となっています。その背景には企業内において自己表現の自由を認めないと優秀なエンジニアが集まらない, そうしないと彼らはすぐフリーランスやミニ企業家に転身したり, 他社に移ってしまうという状況があります。

特に新しい資本主義の登場によりモノづく

りの中心が工場の手の技からソフトウェア技術者にシフトする中, ソフトウェア技術者の創造性発揮の課題は新しい教育などの人材育成法や新しい組織の在り方, 新しい経営論などを模索している状況にあります。ソフトウェアによるサービス支配論理が目目される中, 生産管理や商品企画なども同様です。ソフトウェアや AI, データを理解するデータサイエンティストの経験や素養がモノづくりに関連する全ての人々に求められています。

■個の力の全面開花に置いて行かれる人々

新しい資本主義は正に個の潜在的, 顕在的能力を目いっぱい開花させる, 個人の自己実現欲求が消費においても働き方においても経済を動かす方向に行っているということでしょう。日経新聞によれば日本でも新卒就職40

万人、転職400万人の時代を迎えています。日本の長期雇用制度も何時まで制度的に維持されるかわからない中、新しい資本主義にふさわしい働き方が求められる時代になってきています。

現在、新しい資本主義の波が始まっている米国では、働き方が分解されており、個の能力を目いっぱい引き出す事に成功している創造性発揮型のクリエイティブクラスとそれに適応できずレストランの給仕などの仕事しかできないサービスクラスに二分解していると社会学者のリチャード・フロリダ氏は指摘しています。クリエイティブクラスは2千万円を超える高級をとる一方サービスクラスは明らかに豊かな社会から脱落しています。数年前は「サンフランシスコの家賃の高騰はグーグルの社員のせいだ」として、サービスクラスによるサンフランシスコのグーグルバス（クリエイティブクラスの社員）の阻止運動として人目を惹く程度だった格差の状況が次第に政治の舞台に反映され始めています。

その結果、そう言った状況が2016年の米国大統領選挙にも民主党のバーニー・サンダース氏や共和党のドナルド・トランプ氏らポピュリストへの支持層として表れています。そしてこれからはそれにAIのパワーが失業の

追い打ちをかけるかもしれません。

■ AI とクリエイティブクラスの台頭と日本の未来

さてナレッジマネジメントの観点から見れば、ソフトウェアとデータ活用法の進歩によるAIの台頭の中、現在の職業の49%は減びると言った予測が出ています。また働き方が大きく変化する中、米国を中心に個の能力を目いっぱい発揮できるクリエイティブクラスとそれに追従できないサービスクラスへの分解が始まっています。

かつて農業革命が起こったことにより、人類は背の高さが縮小したり、疫病がはやって多くの人々がなくなる、食物が全滅して多くの人が飢饉に苦しむなど、狩猟・最終社会ではありえなかったような問題が発生したと言われています。それと同じことが新しい資本主義の下、過渡期には起こるかもしれません。しかし飽くまでも自分たちの姿形を変化させ続けると言うある意味で創造性と言う病に取りつかれている存在である我々は経済・企業社会全体のクリエイティブクラスへの変身を目指して、AIを使いこなすしか道はないように思います。

